

行動で色づく私たちの緑

大館中学校 三年 日当 優月

「子供環境運動で、今の世界を変えるために、頑張っています。」

ある日私は、国語の授業で、環境問題について訴える、十二歳の少女のスピーチを勉強した。たった十二歳の少女の勇氣は素敵だと思った。私の周りには緑が見えるし、木も普通に生えている。そう思っていた。

環境問題について考えることもなく、別の日塾の復習授業を受けた。その中で先生が、「昔は森林がたくさんあって、たくさんのお虫もいたんだ。虫を捕まえることが楽しかったぞ。」と、昔を懐かしんで言った。そして、ある質問を私たちに投げかけてきた。

「そういえば、アブラゼミ、見つけたことある人、手を挙げてみて。」

すると、生徒全員が居眠りしているのかと思うくらい、教室が静まりかえった。なんと、

教室に二十人も生徒がいたのに、ぼつぼつとしか手が挙がらなかったのだ。同じ青森県なのに、どうしてこんなに環境が違うのだろう。

私は不思議に思い、調べてみることにした。まず、どうして昆虫の数が減っているのだろうか。原因は私たち人間にあった。農業や都市化による森林伐採、さらには資源採取によるものらしい。これらにより、昆虫たちの生息地が劣化したり、消失してしまったりするのだ。昆虫から

視野を広げて調べてみると、あの日国語で勉強した問題と似たようなものが目に留まった。それは、「森林減少」というもので、数に限りのある森林資源を木材や紙として過剰に利用したり、焼畑や農地の移り変わりによって、森が失われていたりすることである。一〇八九年には六十三万七千八百六十六ヘクタールもあつた森林面積も、年々減り続け、二〇二〇年には、六十三万六千八百八十三ヘクタール。つまり、四十年間でおよそ七千八百八十三ヘクタールもの森林が失われているわけだ。確かにこれほど森林が失われていけば、環境も大きく変わってしまうだろうな、と思った。ついでに、青森県が、なぜ「青い森」という字を書くのかも気になったので調べてみた。昔、青森市のほうに松が青々としげる森があり、それを漁船が港にくるときの目印にしたそう。漁師がその森を「青森」と呼んだことが由来だと分かった。ということはやはり、昔はたくさんのお森に囲まれた緑の豊かな土地だったのだろう。

ここまで詳しく調べて、このままではいけないと心から強く思った。そこで、青森県が行っている森林活動についても調べてみた。

数ある活動の中で、ある一つの活動が気になった。それは、森林に関する活動を主に行う、「林政課」が行っている「企業の森づくり」の取り組みだ。各地の企業が社会に貢献する活動としての森林整備や保全活動に参加しやすくなるため、県内にある森林の情報を集めて提供

したり、森林保持者と企業の調整をしたりしている。また、一般の方々に林業の魅力や特徴を発信し、林業に対する「きつい、汚い、危険」の「3K」イメージの払拭にも力を入れて、将来的に安定した森林整備につながるようになっていることが分かった。活動には小さい子供から大人まで参加できるものが多く、それだけ一人ひとりの意識が大切だということが伝わってくる。

このように、たくさんの人たちの小さな取り組みのおかげで、自然が保たれていると知った私が調べた昆虫も森林も、作物の育成や私たちの住居など、なくてはならない存在がいて、それらがなくなるとはいけないことにいち早く気づいて、すぐ行動に移す人、そして、そのようにして守られてきた身の回りの自然があつてこそ私たちの私たちが思う。

しかし、そのような人たちだけでなく、私たちも何かできることをするべきだと思う。

私は、大館中学校で行っている環境保全の取り組みを探した。すると、私のすぐ身近でも環境に関する取り組みをしていた。授業や予定の連絡などで使われるプリントをリサイクルに出したり、片面のみに印刷されたプリントを再利用したり、一人一台のタブレットを使ったり……。普段、生活しているだけでは気がつかなかったところで、私が思っていた以上の取り組みがあった。私たち中学生にできることなんてなかなかない。そう思っていたけれど、自分の

近くに目を向けることで、自分にできることを見つけることができた。

「環境問題」。それは、簡単に解決できるものではないし、これからも向き合う必要のあるものだと思う。そこで、私は三つのステップが大切だと考えた。まず、身の回りの問題に「気づく」。そして、自分で詳しく調べて

「知る」。最後に自分ができることを「行動に移す」。決して楽なことではない。でも、未来の人、私たちのためにはこれは欠かせない。緑ある未来を育てるために……。